



ANALISIS PENGGUNAAN ADJEKTIVA NOMINATIF DALAM BAHASA JEPANG (Berdasarkan Data Sintaksis Corpus)

Dwi Puspitosari
Osaka University
email: dwipuspitosari89@gmail.com

Info Artikel

Sejarah Artikel:
Diterima Februari 2019
Disetujui Maret 2019
Dipublikasikan Maret 2019

Keywords:
Adjektiva, nominatif,
korpus

Abstract

This study aims to identify nominative adjectives in Japanese that are difficult to categorize based on the occurred changes when these words are produced along with the other words. For non-native Japanese learners, this has become a challenging issue. The main reason is the adjective that was classified into two categories in accordance with their changes, i.e., i-adjectives and na-adjectives. These adjectives presented different forms of change that had a tendency of transforming into nouns when collaborating with other nouns. Not only did learners in elementary and secondary level face the difficulties, but also those in upper levels did. The data in this study focused on adjectives with a high frequency of use that were collected from "Gendai Nihongo Kakikotoba Kinko Koopasu". The data was analyzed based on the use of adjectives in sentences taken from the corpus data, which underwent different forms of changes. The results of this study indicated that there were many adjectives that underwent different forms of changes and could be classified into multiple word classes.

Abstrak

Penelitian ini bertujuan untuk mengidentifikasi kata sifat-kata sifat yang bersifat nominatif dalam bahasa Jepang yang sulit dikategorikan berdasarkan perubahan saat berhadapan dengan kata lain. Bagi pembelajar bahasa Jepang non-native speaker, hal seperti ini merupakan permasalahan yang dirasa sulit. Alasannya adalah karena kata sifat yang menurut perubahannya diklasifikasikan menjadi dua yakni kata sifat -i dan kata sifat -na, mengalami perubahan yang tidak seragam dan cenderung menjadi nomina saat dihadapkan dengan nomina. Tidak hanya pada pembelajar tingkat dasar dan menengah, pembelajar tingkat atas pun mengalami kesulitan. Pada penelitian ini, data akan difokuskan pada kata sifat dengan frekuensi pemakaian yang tinggi dan dikumpulkan dari "Gendai Nihongo Kakikotoba Kinko Koopasu". Proses analisis data dilihat dari penggunaan kata sifat dalam kalimat diambil dari data corpus, yang mengalami perubahan tidak seragam. Hasil dari penelitian ini menunjukkan banyak kata sifat yang mengalami perubahan tidak seragam dan dapat diklasifikasikan ke dalam kelas kata ganda.

© 2019 Universitas Negeri Semarang

✉ Alamat korespondensi:
Gedung B4 Lantai 1 FBS Unnes
Kampus Sekaran, Gunungpati, Semarang, 50229
E-mail: jsda_nurjaleka@mail.unnes.ac.id

ISSN 2252-6250

はじめに

外国語として、初級の日本語学習においては「動詞」、「名詞」、「イ形容詞・ナ形容詞」、「助詞・副詞」という大雑把な分類をされている。非母語話者に対する日本語教育における問題の一つに、いわゆる「形容動詞（ナ形容詞）」の取り扱いがある（野呂、1994）。野呂も「「有名の人（有名な人）」「大きいだから（大きい）」「きれいな部屋（きれいな）」のように、他の品詞と混同した誤用を起しやすく、しかも上級になってもなかなか直らないのが現状であると述べている。その原因として、「イ形容詞」と「ナ形容詞」の区別が学習者の母語に存在しないために、両者を区別することが困難であることが指摘されうる。

本稿では「ナ形容詞」を「名詞的形容詞」あるいは「形容詞的名詞」と呼ぶことにするが、その根拠は判定詞「だ」を伴い「述語」になるという点は名詞と同じであり、文論的あるいは統語的は名詞も形容動詞も、両方に扱われやすいものからである。本稿では日常的に使用頻度が高い単語を「現代日本語書き言葉均衡コーパス」から収集し、考察を行う。

日本語における収まりにくい名詞的形容詞の統語的な考察—現代日本語書き言葉均衡コーパスデータによる—

「同じ」という単語を聞くと、品詞分類のどこに入るかと言えば、「形容動詞」か「名詞」かという困難のある答えが出てくるかもしれない。それは、「きれいな」と同様に「きれいだ・同じだ」というのはナ形容詞（形容動詞）である形式にも取れるからである。しかし、一般に認識されているのはナ形容詞、例えば「きれいだ」が「きれいだろ（う）／きれいだっ（た）／きれいだ／きれいな／きれいな（ら）」のように多くの活用をするのに対して、「同じだ」は名詞に続く連体形が「同じな」とならず、「同じ」となる点でこれと異なっていると考えられるかもしれない。しかし、次のコーパスの用例集から見ると、助動詞の「わけ」と連結すると、両者は「な」が出現する必要があることが分かった。さら

に、「同じ」は名詞・助動詞と連結すると、「の」が必要になって、むしろ「名詞」としての方が扱われる可能性が高い。

- (1) しかし、彼が本当に好きなわけではなく、経済的な意味での付き合いなんだな。
- (2) いろいろ思うことはあるけれど、私は決してこの義理の姉が嫌いなわけではないのだ。
- (3) 性について語ることはつねに必要なわけではないが、それが必要であるときに口をつぐむのは表現の不足ということになる。
- (4) 自己資本比率を改善したいという意味においては両方同じなわけで、だから先生のおっしゃるように、土地の再評価をやる。
- (5) 全く同じ趣旨の研究を逆方向から言っているだけでございまして、つくるものそのものは同じなわけですね。
- (6) 人間で言う、絶食と同じなわけだから、いい加減、限界がきているのだろう。
- (7) 以上が船中八策だが、明治維新以後の日本はこの八策と大体同じの方針で、封建社会から資本主義社会になっていった。
- (8) 本家は結構いいお値段するので、成分ほぼ同じの別製品を効くのかな？とりあえず、チョコラBBは口内炎に効いた試しがない。
- (9) 一番フォローすべき同じの部署のコトは、全くしない。自分の仕事じゃないから～
- (10) ゴール決められて「もったいない」といってるのと同じのような気がします。
「もったいない」じゃないよ！！
- (11) 文字色や文字サイズは関数の入っているセルの書式で決まります。これは他の関数でも同じのはずです。
- (12) 行った一軒が彼女の家だった歳も同じのためのもあり仲良くなったらしい家

に帰る時に彼女と彼女の母親が見送った。

以上のだけではなく、「同じ」という語は「おいしく、やさしく」のように「イ形容詞」における連用形に似ている用例も少なくない。現代日本語書き言葉均衡コーパスのデータによると、動詞・名詞・イ/ナ形容詞の前に来る「同じく」の連用形の用例は代表として次のようである。

- (13) 弟子は、子弟というに同じく、出入は、家庭の内外を意味する。
- (14) 時を同じくして日本陸戦隊がマレー半島に侵攻し、シンガポールに空爆が加えられた。
- (15) このセネガルもクロアチアと同じく初出場である。
- (16) 向かっての人口減少には、高い死亡率が、また、天保中期における減少も、同じく高い死亡率によってもたらされたものである。
- (17) 偏差若い男も、若い女達も、大嫌いだ。中年も、初老も、老人も、同じく嫌いだ。

以上の用例を見ると、「同じだ・同じな」を連体形が特殊なナ形容詞と考えることも可能であるし、連体形を持たない名詞として考えることも可能である。後者の場合、名詞を修飾する「同じ」は、ナ形容詞「同じな」の連体形ではなく、「同じの」になり、これは別の語である連体詞として扱われることになる。それに対して、(13)～(17)の用例のような「おいしく、やさしく」のイ形容詞の連体形と同様で、イ形容詞に分類されると考えるのも不可能ではない。

- (18) 同じ休みをとるのなら、旅行にでも出掛けたい

(<http://www.alc.co.jp/jpn/article/faq/03/135.html>)

- (19) 人になっていて三人でよく行動しています (Bちゃん) AとBは塾が一緒に私も同じ塾に来るように誘って来ています

たが、私はどうも人と会話したりするのが苦手で、

- (20) ハウジングのよさはわかったが、ものによってはデジタルカメラ本体と同じぐらいの値段になってしまう。

- (21) シンガポール、インドネシア、マレーシア、フィリピンなども同じだ。これらの国々の大衆は日本企業が経営権を持つ合弁会社で、驚くほど安い賃金～

また、(18)は連体形もなく、後ろに来る名詞はすぐ連結した。意味から見ると、(18)の「同じ」は「どうせ」「せっかく」といった意味が生じると考えられる。それと違って、(20)と(21)は「AとBは同じだ」における「同じだ」には、このような意味は取られないと思われる。したがって、(18)は、ナ形容詞「同じだ」とは異なる語であると考えることが妥当ではないかと考える。

他の名詞的な形容詞は、例えば「平和」である。次の用例を見ると、名詞の前に「の・な」の出現が必要「ナ形容詞」にも「名詞」にも分類しあり得ることが分かる。

- (22) 白は平和の色として扱われてはいない。ガリツェフの部屋で湯を浴びるイワンの体は白く輝くが、(略)
- (23) 日本は平和の維持、促進に最大限の努力をしなければなりません。
- (24) そのことによって平和の実現を目指す試みだ、という内容だった。
- (25) ようやく平和な生活を手に入れ、愛するひととともに暮らしていたのに。
- (26) (略) フローラルな香りとひとつに結ばれ、心と体のとれた平和な世界を実現してくれる。
- (27) 当人同士はものすごく憎み合って、それこそ平和な日本に稀なほど殺し合ったりしている。

文末に現れた形式が全く同じでも、品詞に違う分類されているものがあることが見られてきた。

- (28) 「今、この国に必要なのは平和だ」→「名詞」(知恵袋)
- (29) 食糧もないし治安も悪くなった。なによりほしいのは安全と平和だ。→「名詞」
- (30) 食糧もないし治安も悪くなった。なによりほしいのは安全と平和だ。→「名詞」
- (31) 「今、この国は本当に平和だ」→「形容動詞」(知恵袋)
- (32) モカモカのもちちゃんの頭です。平和だ。→「形容動詞」
- (33) いや、まだ他人のことだと感じている間は平和だ。→「形容動詞」

それに対して、名詞の前に来るイ形容詞は「な」の出現不要だが、名詞の前に来る時、出現必要になる特別なイ形容詞もいくつかあると知られている。

- (34) 本当の優しさってのは、たとえツライことでもキチンということのできる、大きな大きな勇氣です。
- (35) この建物の一角にある大きい部屋を自由に使えることになり、山の中では使わない装備を置かせてもらうことにした。
- (36) (略) 具体的には(国の経済を構成している)消費者や会社などの小さな視点から経済の流れを考えていく学問のことなんだ。
- (37) 突然、彼の目はジンジャー・ポップのおかしい顔をとらえた。
- (38) 相手の善意の感情を引き出すためには、あたたかな心の配慮が不可欠です。

「申しわけありません」楽毅は苦笑した。

(39) 司馬熹は邑内にこまかな手を打っておいたらしい。「さいわい、ここまで来た。あとは正門だ」

(40) 波と遊んでいたときの歓喜に満ちた顔とは違い、とてもやわらかなほほえみだ。「また来られるのかな」なぜだかわからないが、突然、そう思った。

用例の(34)は(35)と比べたら、客観的使用、物理的的大小には「イ形容詞(35)」、心理的使用では「ナ形容詞(34)」という先行研究はいくつがあるが、南波(2012)が検証のうえ、そのような使い分けははっきりとは見られないと述べている。それに対して、(40)「やわらかい・な」について、例えば「やわらかい本」は通俗的な本、という意味の慣用的な表現であり「やわらかな本」ということはできない。「やわらかな意味」は言えるが、「やわらかい意味」ということはできない(飛田・浅田、1991)が述べている。その他、森田(1989)は「こまか {い・な}」に関して、「細かな」は「細かな...こと、点、波、音、戦慄」などに用いられ、物質にはあまり用いられないと述べている。また、「細かな...砂、葉、金(かね)」よりは「細かい...砂、葉、金(かね)」を多く用いる。細部にまで及んでいる様子を表す場合の「細かい」は多くの場合「こまかな」に置き換えられるが、金額が少ない様子を表す場合の「こまかい」は「こまかな」に置き換えられないと述べている。

つまり、次の「イ形容詞」の「大きな」、「小さな」、「あたたかな」、「こまかな」、「やわらかな」の連体詞は客観的・物理的使用ではなく、比喩的・抽象的使用の傾向が見られる。

筆者が面白いと思うのは、以上と似たように、ある「イ形容詞」は特定の単語とくっついて、形容詞の最終の送り仮名の「イ」を抜いたら、音読みにならず、訓読みのままで「な形容詞」になり、「な」の出現が必要になる。

- (41) 「さしたる騒ぎではあるまい。捨て置け」
討手の派遣にも気乗り薄な顔をしたが。
秋になっても騒乱はやむどころか、近畿
の諸地方へじりじり戦火が拡大し〜
- (42) アーノルドは気短な言動によって身を
滅ぼすことになった。
- (43) そのタイミングは後から詳しく解説し
ますが、それ以外に「相対的に割安なと
きに買う」ということも大切です。
- (44) かたわらの部屋からは医者であり僧侶
であるメルスーの声高な祈りの声が聞こ
えてくる。

おわりに

本稿では、日本語における品詞分類の名詞的
な形容詞、「イ形容詞」の連体詞の用例を収集
した。以上に取り上げられた事例の他の語は、
例えば、元気、普通、健康、自由、沢山、特別、
最高、親切、安全、不思議などは文章に主語と
なれ、名詞を修飾するときには「な」のときも
「の」のときもある。つまり、日本語における
品詞分類に「名詞」も「形容詞」も一つ以上の
分類になり得る語は少なくないと分かるよう
になった。また、文法的には形容詞は連体修飾と
叙述どちらの機能も持っている「イ形容詞」も
多く見られる。

日本語教育の視点から見ると、一つ以上分
類され得る語は実際の使用は誤用問題の原因
の一つと言える。一方、日本語学習者は「ナ
形容詞」の「形容動詞」と「名詞」の機能、
或いは「イ形容詞」の「一い」と「一な」の
両方の使い分けが分かれば、より豊かな表現
の使い分けを習得するのに役に立つだろうと
考えられる。

参考文献

- <http://www.alc.co.jp/jpn/article/faq/03/135.html>(2019年2月27日アクセス)
- 現代日本語書き言葉均衡コーパス (
<http://www.kotonoha.gr.jp/>) (2019年2月
27日アクセス)
- 三枝令子(1996)「「小さな旅」と「小さい
旅」」『言語文化』33 一橋大学語学研
究室
- 飛田良文・浅田秀子 著(1991)『現代形容詞
用法辞典』東京堂出版 pp.251-
252,pp.573-575
- 野呂幾久子 (1994)「日本語教育における
『形容動詞』の取扱いに関する一考察」、
静岡大学教育学部研究報告(教科教育学編)
第25号(1994.3) 1~12
- 森田良行(1989)『基礎日本語辞典』角川書店
pp.117-119, pp.449-451